

# 技術研究会によせて

分子科学研究所 管理部長 岡田 修 一

本報告書も今回で第3冊目となる。早いもので、昨年2月26日に第1回研究会が実施されてから1年が経過した。

本研究会の主旨、目的及びその役割については、第1回及び第2回の報告書に、それぞれ井口教授、高橋技術課長が述べられており明確である。

しかし、本研究会は当研究所が設置される以前、或は発足に際し、実施計画があったものではない。技術課長が着任され、御本人の名古屋大学在任中の経験から生み出された計画である。

研究会の実施計画を策定する段階で検討された問題点は、概ね次の諸点であり、大要以下の考え方で開始することとなった。

## 1. 研究会の内容

本誌第2号に述べられているように、○各人の持つ技術の公開と討論○新技術の学習○設備設計製作の中間報告○技術書の輪読○研究者の講演受講等とした。

## 2. 対 象

研究会参加を呼びかける対象の範囲は、所内、所外を問わないが、経費、施設、内容の面からの制約を考慮し、当面は地域的にしぼり、所内と名古屋大学の理工系関係に在勤する技術者とし、人数は約30人程度と考えた。現実にはこの計画を伝え聞いた機関からの参加申込もあり、参加機関は名大、都城高専、東大物性研、学習院大学等があった。将来は、実施の経過をみながら逐次整備することとなったが、他の地域においても類似のものが発生し、地区間の交流が行なわれるようになればと夢見ている。

## 3. 所内事業としての位置付

あらかじめ研究所の事業として予定されていたものではないこと、試行的な段階であること、又一方若干の予算も必要であること等から、その取扱いは、所内共通の理解と了解が必要となる。そのため運営連絡会（所長、研究主幹、部課長で構成する会議）の場で検討した結果、研究支援のための技術の向上に資するとの観点から、一応共同研究

事業の一環として考えることとされた。将来は技術者研修制度確立への方向で整備されることが望ましいと考える。

#### 4. 経 費

必要とされる経費は、所内措置として共同利用専門委員会の審議を経て共同研究費、共同研究旅費の一部をさいて充当し、その種類は報告書印刷費若干と参加者の参加旅費である。

現在は東海地区内の近距離を原則としているため、車馬賃程度の交通費実費でまかないががついているが、将来は何等かの形で、この種の仕事のための予算が積算されればと希望している。現在遠距離の機関からは自費参加の申込もあり、その熱意には敬服している。

全国国立大学その他の研究機関に在職する、研究支援技術を担当する方々は人数も多く、又、職務内容の種類も多岐に亘り、想像するに、明確に類別した数量的把握はなされていないのではないだろうか。従って一概なことは云えないが、研究支援技術の範囲の各分野共に、技術の継承又は向上のための、交流的な研修の場として確立されているものは無いのではないかと思う。職場の中の限られた部分或は個人対個人の段階のものは非公式にはあるであろうが、云われるところの、職務の現状の閉鎖性もあって、公的に明確化した研修の機会は少ないと聞いている。

一方、研究の進展から、支援技術に対する質的、量的な向上への要望は、時を追って増大しているとも聞く。

これら技術者の研究或は研修の機会の公的な附与については、全体の制度、予算を考える立場の方々や、支援技術を必要とする研究者の方々にも御理解戴くと同時に、技術者自身も考えなくてはならぬのではないだろうか。

当研究所の技術研究会を開始するに当って参画した者の一人として、その経緯を記し、今後のための記録としたい。